



# 南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

## 今年の教区の目標

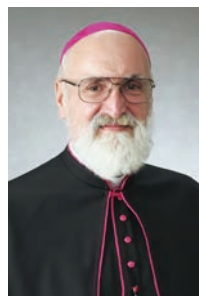
すべての命を守るため、  
キリストと共なる  
平和の道を歩みましょう。

〒902-0067 那覇市安里3-7-2  
カトリック那覇教区本部  
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474  
発行人 W.F.バートン司教 1部40円  
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2020年9月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第742号 (9月号)

## 「わたしはだれの死をも喜ばない」 (エゼキエル 18:32a)

ウヤファフジ (親・先祖) の教えを胸に、イエス様と共に信頼と希望と愛をもって誠実に歩み、そして神のみ旨に委ねましょう。



カトリック那覇教区長  
ウェイン・F・バートン司教

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、  
私たちは今、世界中に及ぶ感染拡大による命の危機という共通の逆境の中を生きています。しかし、どんな苦境にあっても、私たちは歴史を通して導かれるイエス様への信頼・希望・委託を見失うことなく、主とともに生きるよう招かれています。

「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い／魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」(詩編二十三・1-4a)

さて、最初の感染流行期(第一波)で、私たちは未知の感染

症への恐れから、主要な活動を停止することによって、感染拡大の経路を断ち新型コロナウイルス感染者の少ない沖縄を二カ月にわたって保つことができました。しかし他方、社会・経済活動を控えることで別の被害も表出してきました。経済的な困窮や学ぶ権利の制限、家庭内不和や様々なストレス症状、差別や猜疑心の増大など。普段は何となくやり過ごしてきた数々の問題が、個人としても社会としても表面化し、このまま立ち止まっていくわけにはいかない状況に気が付いてきたのです。

そこで、これまでの経験や医学的見地に基づく新たな生活様式を採ることによって、感染防止をはかりながら様々な活動を

徐々に再開しようと試みてきたのですが、その矢先に第一波をはるかに上回る感染流行期(第二波)を迎えてしまいました。

ただし、いまは第一波の経験からいくらか感染者数が増加しても、前回と同様に社会活動を大規模に停止する措置は採らずに、何とか感染防止と



「旧盆追悼死者ミサ」亡くなられた司教、司祭、シスター、ウヤファフジ、親戚、友人のために祈る (コザ教会)

社会・経済活動の両立を模索しているのでしょうか。このことは、どのような状況下でも人は衣食住の必要を満たすため働き学ぶことを必要としていることを意味します。病から命を守ることと命を養うための活動がいくらか相容れないといっても私たち人間はこれを両立させなくては生きてゆけないから致し方ないという考えです。人間としてはこのような選択を十分理解できませんが、そのことによって、重症者が増え、病人と医療従事者が苦しみ、特に多くのお年寄りや持病のある方がいのちを奪われていることに強くチムグルサを感じてしまいます。と同時にキリスト者としても、このような社会の動きからもたらされる結果は、耐え難いほどの苦痛です。こうした人間の限界を理解しながらもお、生命を優先する価値観を生きていることが信仰者の使命ではないでしょうか。

ウイズ・コロナ時代の旧盆にあたり、ご先祖様からのクガニクトウバ(金言)が精神的に大きな支えとなります。先人たちが受け継いだウチナーンチュの価値観は「ヌチドウタカラ」であることは揺るぎません。自国が減じようともいのちを選択するように論し

た尚秦王の精神は、神が「すべての命はわたしのものである。父の命も子の命も、同様にわたしのものである。わたしはだれの死をも喜ばない」(エゼキエル十八・4、32a)。と語ったとする聖書的な価値観に通じています。

同様にウチナーンチュの生命観も聖書的で、命は決してこの世の肉体的な命存在のみを指し示すものではありません。それは、オジーオバーを大切にするのみならずグアンス(元祖)の存在に命をもひつくるめてウヤファーフジ(親・先祖)と表現して生者も死者も同じように大切にしていることにも表れています。「いのちが最優先！」これが沖繩の譲ることのできないことです。

ある日、一人のオバーがコロナ禍で心配している私を有名な沖繩の言葉で励ましてくださいました。「ナンクルナイサー！」と。直訳すれば「なんとかなるよ！」という意味です。しかし、この言葉にはもつと深い意味があります。本来は「ナンクルナイサー」の前に別の言葉があつて、省略せずには「マクトウソーケイ ナンクルナイサー」というのです。翻訳すれば、「誠実にしてなさい、なんとかなるさ」という意味です。即ち、「くじけずに正しい道、神に対する誠実さを歩むならいつか必ず必ず自ずからなる」良い日が来るといふことでしょう。

コロナ禍は大変ですけど、一日も早く良い日を迎えるために、ウヤファーフジ(親・先祖)の教えを胸に、イエス様と共に信頼と希望をもって誠実に歩み、そして神のみ旨に委ねましょう。

## My Daily Prayer of the Holy Rosary

Fr. Sonny, MSP

My daily Rosary prayer starts no matter where I am. Most of the time early in the morning, when I started driving with the car, before the mass, and before I retire at night. Today the month of October starts not in counting from the start of the day but through praying the Rosary. I would like to share the month of rosary journeying in the midst of its mysteries. There are stages in our life that through sharing, reflecting and experiencing that we can truly share our prayer journey with the Holy Rosary.

The joyful mystery is entrusting my self as well as my task and plan everyday through the intercession of the Blessed Virgin Mary. How many of us, as soon as we open our eyes early in the morning that we still remember to pray or begin our day in prayer. Our lives here are surrounded with the streets, environment, cars, schools and many establishments that seldom we can pray. It is almost a luxury for us now to remember that we need to pray daily or even to start the day with the sign of the cross in our mind, heart, and in our lips. Right after the mass I pass by with the same road that I usually pass by suddenly a recent accident came to pass because the day starts in discussion, quarrelling, and problems. Indeed, the start of our day can also be the last that we can see, examine and experience today and forever of our life.

The sorrowful mystery is accepting our mistakes and learned from the past in order to continue our journey. We sometimes call the many regrets of ifs and buts as a must to accept because these are needed as part and spices of our life. We learn from the school of life with much training of pains, hardships, examinations and painful failure. But it does not mean that we will remain from where we lost but we continue because there will be the next day waiting ahead of us. Sooner or later the sun will shine from the east and set into the west like our mistakes and sorrows in life.

The luminous mystery is doing my task with enthusiasm everyday in my life. No matter how good we are and sometimes we are almost perfect in our daily routines. However, in our lives in a glimpse of our eyes we meet sudden surprises that we do not want to go back from where we started in life. I would like to name some, failures, trials, obstacles, problems or concern that we never want or plan ahead but it pops out from nowhere. I call it learning experience because all those are necessary like of the storm in life that can clean and wipe away the many tears and pains in our life.

Finally, there could never be a glorious mystery without surrendering and dying from our own self. Our vocation, our future as well as our life can only find true meaning as a baptized priests, prophets and ordain servants of God only and through Jesus. On this month of the Holy Rosary: let us all be inspired to pray and to journey in our own mystery side by side with the joy, passion and resurrection of Jesus so that we can obey, live and proclaim the Holy Gospel. Amen!



# ゴシップ(悪口)を 言い合ってはなりません

セクウェラ・ナビーン・ジョセフ神父  
普天間教会・主任司祭



やかげぐちを聞いたたり、それを広める役になってしまったりしたことがあるかもしれません。ゴシップは、そこに居合わせない人について、問題の当事者でもなく、また、解決役でもない、まったくの第三者にしゃべることです。もつといえ、本人の陰で、その人のことを話するとき、陰口、ゴシップとなります。スポーツ、折り、趣味は人々を健全な方法で結び合わせますが、ゴシップは、人々を有

現在世界中が新型コロナウイルスの脅威に直面し、この感染症はとも多くの人を苦しめています。しかし、この最悪のコロナウイルス(COVID)より怖いウィルスがあります。ゴシップという悪徳の病(Gossiping Vice Disease)ともいえます。それは人々を苦しめ、その名誉を傷つけ、しかも、その感染は急速に広がるものです。ゴシップは、大人の集団、ちゃんとした人たちの間ではありえないものです。ただ、残念ながら、わたしたちの各小教区でも見つけられます。みなさんも、うわさ話

害で不健全な方法で結び合わせます。そうして集まっては、よく調べもせずに偏見と推測で判断し、人間関係を壊すような非難をします。なぜ、うわさ話をし、陰口をたたいてしまうのか考えてみたことがあるでしょうか。一人ぼっちだと感じたくない、不安定な気持ちになりたくないという思いから、ゴシップに走り、見かけだけの、醜い優越感に浸ります。わたしたちは、自分たちの弱さを隠すべく、

他の人に目を向けてしまいます。自分自身がうまくいっていないことを紛らわすために、他の人の欠点をあげつらいます。ほんとうは羨ましいと思っている相手の、評判、才能、ライフスタイルをおとしめるために悪口が使われます。ゴシップを口にする人こそ、実は、注目されたいのです。ゴシップは、わたしたちにどのような影響を与えるでしょうか。ゴシップに関わってしまうと、周りの人たちの間に見えてくるのは、ただ不信だけで、キリスト教的で、霊的な証人(あかしびと)となることができませぬ。そうなるにせよ、自分が何者かも見失います。他の人との関係が傷つけられ、消滅してしまいます。回り回って、自分に戻ってきます。ですから、口走りそうになった瞬間にうわさ話、悪口を押しとどめましょう。

ではどうやってゴシップをとめたり、うわさ話を打ち切ったりすることができのでしょうか。聖書は、力強くその助けとなってくれます。  
・「兄弟たち、悪口を言い合ってはなりません」(ヤコブの手紙四・11)。  
・「兄弟たち、裁きを受けないようにするために、互いに不平を言わぬことです」(ヤコブの手紙五・9)。  
・「悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが

与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい」(エフェソの教会への手紙四・29)。  
・「今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て」なさい(コロサイの教会への手紙三・8・9)。  
・「口を自ら制する者は命を保ち、いたずらに唇を開く者は滅びる」(箴言十三・3)。

なぜ、他の人の話をうのみにして、別の人について意見してしまうのでしょうか。正しいことかどうか自問しているでしょうか。間違いを質し、裏付けをとろうとしているのでしょうか。たまたま耳に入るゴシップによって意見を定める権限を神が認めているのでしょうか。

有名な哲学者ソクラテスが家で座っていたところ、見知らぬ人がやってきて、「やあ、ソクラテス、あなたの友人について話したいことがある」と言ったそうです。それを聞いたソクラテスの返事は次のようなものでした。「わたしの友人についての話、しっかり聞かせてもらいます。ただし、三つの条件を満たした場合だけです。その人は「三つの条件とは」と聞きました。ソクラテスは答えました。「第一に、わたしの友人について話

そうとしていることは、その人についての良いことですか、悪いことですか。その人は、「あいにく、悪いことだよ」と答えました。そこで、ソクラテスは「わたしはその話を聞くわけにはいきません」と断りました。ただ、もう一回チャンスを与えようと、「その話は、真実ですか虚偽ですか」と尋ねました。その人は、「いや、まだ確証はないね」と答えました。「では何も言わないでください」と言いつつ、ソクラテスは、「その話は、わたしやその友人にとって有益なものですか、無益なものですか」と尋ねました。その人は、「特に役には立たないね」と答えました。ソクラテスは「出ていってください。その話は聞きたくありません」とやりとりを終えました。

ソクラテスに倣って、誰かがうわさ話をしようとしたら、三つの条件にあてはめ、これらのフィルターにかけてください。それはよい話でしょうか、それは真実でしょうか、それは、有益な話でしょうか。最後に、もし誰かが、他の人の話に巻き込まれるとしてきたら、その人に、「なんでそんな話をするのですか」と遮りましょう。言われた人は、気をそがれ、しようとしている話には関わりたくないのだなとはっきりと分かります。「主よ、私の口に見張りを置き、私の唇の戸を守ってください。」(詩篇・141・3)

寄稿

## 「貧しい人」との出会いとかかわりを通して

司祭叙階二十五周年を振り返って②

横須賀三笠教会 横須賀大津教会主任司祭 浜崎眞実神父

「贖う神と貧しい人」の関係は「生存権保障の義務を負う国家と生活困窮者」の関係に同じ

レビ記二十五章には人や土地の買い戻しの権利についての規定が記されている。土地も人も神のものだから、人が人を所有することはできないし、他人の土地を奪うこともできない。買い戻しの権利が認められているのは、人や土地の最終的所有権者は神だからである。貧しくなって自分の所有地の一部を手放すことになった者の土地を「買い戻す義務を負う親戚」（レビ二十五・25）と訳される「ゴーエール」という単語がある。それは「買い戻す、贖う」という動詞「ガーアール」の分詞形で名詞にもなる。それを神と人との関係にたとえると、神が人間を「贖う（買い戻す）」となる。「わたしは主である。

わたしはエジプトの重労働のもとからあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う」（出エジプト六・6）。この「贖う」は「買い戻す」とも

訳されるし、並行法で記されているので、「導き出す」と「救い出す」とも言い換え可能である。「贖う（買い戻す）」とは、神だけの

真の所有者とすることで築かれた社会秩序（平等社会＝人間による人間の支配のない社会）を、取り戻すことである。それは具体的に

は、あるべきところから切り離されてしまっている者が元に戻されることで実現する。身内のいりや財産に責任を負って、元の居場所に戻す責任は「親戚（ゴーエール）」にあるが、イザヤ書四十四章（第二イザヤ）では、神がその義務を負っている主張する。あるべきところから切り離され捕囚の身にある民をバビロンという捕囚地から「約束の地」へ連れ戻すのが神という理解である（イザヤ四十一・14、四十三・1、44・21・22、四十八・17など）。借金がかさんだり、なんらかの理由

であるべき場所から切り離され、奴隷状態にならざるを得なくなつた者を元の自由な世界に連れ戻す義務を負っている親戚と同じように、神は近い存在であることを表

している。

それと同じ構造で、現代日本社会では国家があるべき場所（居場所）に連れ戻す義務を負っている」と理解できる。日本国憲法の原則では、国家は健康で文化的な最低限度の生活を保障する義務を負っているからだ。

したがって、この国に対して適切に義務を果たすように促すのが野宿者支援でもある。国家の存在が正当化されるのは、その国に生きるすべての人の自由・平等・安全を保障する限りにおいてのみである。つまり国家は人々の生活（いのち）を保障するという公的責任を有しているのである。これが基本である。しかし、それは実現されているわけではないのも事実である（生活困窮者が生活保護法から排除されている事実は、生活保護法の捕提率の低さからも明らかである）。

社会がつくる秩序が誰をも排除していないければいいのだが、それはありえないことだ。人間が集まれば、どこかで境界線ができてしまう。国が介入して法律にまで

なってしまうと排除の壁にさえなる。しかし、そのような社会の真ん中で生活していると排除の壁は見えない。排除されている人と出会って初めてその壁や境界線が目の前に現れてくるというのが、私たちのごく一般の経験ではないだろうか。そのとき、自らの加害性にも気づく可能性が出る。それは地域、家庭、学校、職場など、社会のさまざまな環境における集団の中で、否応なしに発生する権力勾配について自覚的になることでもある。

聖書に描かれている古代イスラエルの法は単に社会の秩序を守り現状維持のためではない。特権を有している側の特権を手放すように求め、追い詰められた一人の人の徹底して肩入れする神の働きがあり、それを思い起こして法が記されている。だとすれば、レビ記十九章十五節の翻訳には問題がある。「貧しい者だからといって依怙鼻肩をしてはならない」とか「弱い者を偏ってかばったり、（力ある者におもねってはならない）などと翻訳されている。ヘブライ語では「ロー・ティッサー・ブネー・ダール」ローは打ち消し、否定の語。ティッサーは「上げる」。ブネーは「顔」。ダールは「足元がおぼつかなく、よろめいて弱っている人」。したがって、足元がよろめ

く人たちの顔を無理やり上げさせるようなことはするな。建前を強制して、背のびをさせるな、との趣旨になる。そんなことをすると転んでしまうのではないかとということだ。

しかし従来の神学を前提にする中立であるようにとの意味の翻訳になってしまう（本田哲郎『聖書を発見する』岩波書店二〇一〇年二二四頁）。聖書が伝えるいのちの神は、中立の神ではない。抑圧と差別によって小さくされている者の側に立っている方である。

## 救済の客体から解放の主体として共に歩む

ハンセン病国賠訴訟の熊本判決が二〇〇一年五月十一日に出た。ハンセン病国賠訴訟にも、私は最初の頃から関わってきた。

一九九八年七月に提訴した第一次原告の十三名のうち、何人かとは善意にさせていたでいる。そのうちの一人、上野正子さんは弁護士に「私たちが悪かったんでしようか。国が悪かったんでしようか。はつきりさせたい」と語った。ここでの原告たちは、「困っているから助けてほしい」と言っているから助けてほしい、自分たちを裁判したのではなく、自分たちを隔離して苦しめた「らい予防法」は憲法違反の法律で、国は間違つた政策を実施したことを認め謝る

大人になって今、また教会に来ている。洗礼は六歳になったその月に、母と受けた。中学生くらいまでは、母に連れられて、日曜日のミサにも参加していたが、次第に足が遠のいて、ミサに行くのは復活祭とクリスマスだけという年が長いこと続いていた。

「神さまって本当にいるのかな」「祈り」って何？成長するなかで、これまで無意識のうちにつくられてきた自分を見直すという時期が、たぶん誰にでもあると思う。それに難病がある

私は、日々のケアや、たぶん同性というのもあって、母親との結びつきが、ちょっと濃すぎるくらいに濃く、当時の私にとってこれは、けっこう切実な問題だった。きつと自意識が強くなりすぎていたというのもあったのだけど、自分の軸に自分の意思で手に入れたものが無いと思うと、とても不安だった。

# たて軸よこ軸

## 少しを委ねて

泡瀬教会 佐久本 萌々

しかし、そんな私のアイデンティティ危機もだんだんと落ち着き、自分が獲得した小さなものから、周囲から与えられてきたものや他者へと、次第に意識が向くようになっていった。

それから、もう一度、宗教とキリストの教えを学びたいと思っただ。ふつうそれには、他者よりも自己を見つめるために近づくといいことが多い気がするけれど、もっと身近な人や与えられたものを知りたいために、私には必要だった。そして、そのときも大切にしていたことは、自分が自分の意志で近くということ。

だが、近づくほどにわかったのは、自分と神との直接の繋がりが

ただ、気づいたのは、これまで自分の考えというのをとても大切にしていたが、自分らしくあるために、自分を保つために、流されないと必死になるあまり、余裕がなかったということだ。自由でいようとして、何にも縛られまいと思っていたけれど、自分を一番縛っていたのは自分自身だった。

少し話が異なるのかもしれないが、宗教を学んでいるとよく「自分を捨てる」「無私」と言った言葉が出てくる。どうして一番大切な人にですら、譲ることができないのだろう。なぜ自分の思いが先に出てしまうのだろう。時々、そう思ってしまうことがある。

愛とはなんだろうか。

最近、ある聖人の話を読んでいる。自分の軸を持つことと自分を捨てるということは違うのだと知った。少しだけ、見えないものに、自分を委ねてみたい。

全てを委ねることは、まだ怖くてできないので、少しだけ。

「これからもきつと、信仰の道について、離れたらするでしょう。でも離れても、終わりには、あなたの思う道と一つになりますように。」

これがいまの私の精一杯の祈りだ。もつと自然に、自由に、純粹に、余裕をもっていたい。いま、そう思っただけで教会に来ていない。

ようにと訴えたのである。

これは障害学が主張する「配慮の平等」とも重なる。そこで宗教者も問われたのは、ハンセン病患者を救済の客体にしたことであつた。確かに隔離施設の療養所に足繁く訪問したのだが、それは国の隔離政策に異を唱えるのではなく肯定するように自らと入所者に促すものであつた。それに対して、原告たちは憲法の人権条項に訴え、自らの被害を語り裁判そのものが人間回復の場にもなつた。すなわち国賠訴訟というチャンネルで救済の対象から解放の主体としてともに歩むことを呼びかけたのだ。

私たちの社会は非対称である。そのようなところで対人関係が救済される側と救済される側に固定化されると暴力や人間による人間の支配に陥ってしまう。救済の客体や援助の対象ではなく、解放の主体として協働する関係を紡いでいくことの大切さを学んだのは教会の中ではなかつた。出向いて行くことで、野宿を強いられるいたり暴力によって居場所を失い避難を強いられる生活困窮者やハンセン病と共に生きてきた人たちが学んだことであつた。それはガリラヤで生きたイエスの息吹にも触れることだと確信している。

おわりに

二十五年前司祭叙階の記念のカードには、マタイ九章十三節から『わたしが求めるのは憐みであつて、いけにえではない』とはどういう意味か、行つて学びなさい』との箇所を選び記した。当時「行つて学びなさい」が気になつていった。二十五年を振り返ると、出向いて行くように促す風がどこからか吹いてきてそれに乗つていったように思う。いつの頃からか、わたしの周りには不思議な風が吹いているように感じてきた。それは「境界線」に立つときに起こるようだ。これからも出向いて行くように促す風は吹いてくるでしょう。さまざまなお会いや経験を通して学んだことの一部を紹介させていただいた。二十五年前、一月に阪神淡路大震災が起き、三月には地下鉄サリン事件が起きた。その直後に叙階を受けた。今年も新型コロナウイルス問題で世界中に激震が走り対応に追われ、不安が広がっている。何かとお騒がせな巡り合わせを生きているようだ。こういうときだからこそ、個人の不安や恐怖心から社会が暖味さを許容できなくなり排除の境界線が強化されることのないよう向き合ひ続けたい。

(二〇二〇年)

司祭叙階二十五周年にあたり

## See You Next Summer Camp!

We all know that the Summer Camp is one of the most important and long-lasting activity of our Diocese. With the grace of God, the Diocese had successfully conducted 52 consecutive summer camps.

This year, we also wanted to organize a fruitful summer camp for our children so that they can enjoy their vacation. At the same time, through the camp we are able to nourish our children's faith and spiritual growth.

With such a purpose, right after the Diocesan Day, the youth and I gathered together to plan for the camp. We have prepared almost all the things for the camp. And then, because of the pandemic situation, we decided to shorten the program into a one-day picnic for children so that they could at least enjoy their vacation together. Unfortunately, due to the rapid spread of deadly Corona virus in our land, we are not able to push through to this activity.

I believed that through this event, God would like each one of us to be ready for any circumstances. The importance is that we should enjoy each moment of our lives in the providence of God.

I really appreciated the readiness and the sacrifice of the youth for the activities. Through our meetings, I realize how important the mutual listening and understanding. I consider these experiences as a grace of God for me in my mission. I hope that together we will make the next year summer camp more fruitful for the children.

As the priest in charge of the Summer Camp, I would like to thank you for your understanding. I would like to thank, Bishop Wayne for his guidance and wisdom which was very helpful for me, not only in this activity but also in pastoral care from here on.

I would like to thank all my brother priests for being patient with my disturbing messages or emails which concerned the preparation for the camp. Above all, we thank God for His protection. I believe that God will always guide us to prepare for a better and more effective summer camp next year. See you all in the next 2021 summer camp. May God bless us and keep us all in His love!

Fr. Joachim Hoai (Priest in charge of the Summer Camp).



## 来年のサマーキャンプで会いましょう

皆さんご存じのように、那覇教区のサマーキャンプはとっても大事で、その活動も長いものです。神様のお恵みによって、教区のサマーキャンプは 52 年間続いています。今年は夏休みの間に子供たちにとって実りあるサマーキャンプを計画しようと思っていました。同時に、このサマーキャンプで子供たちの信仰と霊的成長を願っていました。

このような目的をもって、教区の日のお休み後、青年たちと私は一緒にサマーキャンプを計画するために集まりを持ちました。私たちはキャンプに必要なものを整えました。それから、コロナ感染症の世界的大流行によって、子供たちが皆集まって楽しむ期間を短くして一日ピクニックを計画していました。けれども、コロナ・ウイルスの感染拡大により、この活動を実施することができませんでした。この計画を通して、神様は私たちがどんな事態にあっても備えるよう心がけてくださいました。大切なことは、神様の計画のもとで、どんな生活にも私達が順応できるようにすることです。

私はこの活動に対して、青年達がいつでも対応し、奉仕できることに感謝しています。私はお互いの意見を聞いたり理解することが如何に大切かを学びました。私にとって、神様のお恵みが良い経験になりました。来年は、子供たちにとって実りあるサマーキャンプになりますよう願っています。サマーキャンプ担当司祭として、皆さんのご理解に感謝いたします。ウェイン司教様のご指導とお考えによって、今回のサマーキャンプの計画だけでなく、これからの司牧的な配慮について、とっても役立つものとなりました。さらに、司祭団の皆さま、この計画について私からのメッセージや E メールなどで御面倒をお掛けしましたが、皆さまのご協力に対し、感謝いたします。

中でも、私たちは神様のご保護に感謝しています。来年は良いサマーキャンプが準備できますように神様のお導きを願っています。来年のサマーキャンプでお会いいたしましょう。

神様の祝福とお恵みが豊かにありますように。

ヨアキム ホアイ 神父 (サマーキャンプ担当司祭)

### 新たな感染流行期について

ウェイン・バート司教

十ちむがなさ

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、厳しい暑さの中、生活の様々な場面で我慢・気遣い・心労を強いられていることと思いますが、どんな状態に置かれても、私たちは歴史を通して導かれる御父への信頼・希望・委託を見失うことなく、共にこの時を乗り越えて行きましょう。

さて、前回は遙かに上回る勢いの今回の感染流行期は、当初より予測されていたこととはいえ、想像を超える不安と動揺をもたらし、私たちはどのように対処すべきなのかに迷ってしまいます。

しかし、先の見通せないこのような時だからこそ神に寄り頼み、祈りと黙想によって神に近づくことが必要なのです。どのような状況下でも人は衣食住を得るため、働き学ぶことを必要とします。同様に霊的な糧や慰め、清め、励まし等も欠くことのできない事柄だと思えます。そこで那覇教区としては、社会全体の動きを見ながら、これまで以上に感染防止策を徹底しつつ可能な限り霊的サービスの提供を継続していきたいと考えています。

新たなワクチンや治療薬による予防法や治療法が確立されない限り、わたしたちはこのコロナ禍の中を生きてゆくしかありません。そうであれば、人として生きるに必要な物的・霊的糧がどうすれば安全に得られるのかを模索しなくてはならないでしょう。そこで、下記の通りの現状から今後強化すべき点を確認し、信仰生活を支える教会活動を継続したいと思えますのでよろしくお願ひします。

#### 現状

- ・沖縄県内でも地域によって教会の状況は異なる。
- ・現時点で活動休止中の教会 - 愛楽園教会、南静園教会、大里教会、伊江島教会
- ・司祭団 ZOOM 会議 (8/11) で注意深く公開ミサを継続することを確認
- ・沖縄本島にいる各司祭の電話相談でも (8/15) 公開ミサ休止の意向はなし
- ・各教会の主任司祭と信徒の話し合いで感染対策を強化しつつ公開ミサを継続するが、小教区によっては司教と相談の上、公開ミサ休止や集会祭儀等の選択を考慮する。

#### 各教会での今後の重点取組

1. これまで以上に徹底的なウイルス感染予防ガイドラインの実施
2. 聖書勉強会などを休止
3. 食事会などを休止
4. 教区全体の会議などを休止
5. 結婚式、葬儀などは人数制限等の簡素化、簡略化の上での実施



## カトリック小禄教会五十周年 に寄せて

那覇教区の皆様、

皆様の大きな愛に支えられてカトリック小禄教会は今年五十周年を迎える事が出来た事を信徒一同心から感謝いたします。

五十年前、神様がこの共同体を作り命を与え、聖霊の働きかけで今日にいたるまで守って下さったことを心から感謝しております。五十周年に合わせ講演会、行事等予定をしていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大している状況を鑑み、全ての予定を中止することに致しました。

但し十月四日小禄教会のみで司教様をお迎えて感謝のミサを捧げる事に成りました。教区民の皆様にも霊的に心を合わせてお祈りを捧げていただければ幸いです。

何とぞご理解の程宜しくお願ひ致します。

カトリック小禄教会主任司祭

デニス・フェルナンデス神父

信徒一同

### 洗礼・堅信おめでとございます

小禄教会 (五月三十一日)

マリア 山口 貞子

ルチア 玉城 仁美

マルグリット・マリー・アラコク 大森 有紗果

泡瀬教会 (七月五日)

ベトロ 仲本 光那

与那原教会 (八月九日)

マリア・アスタ 照喜名 エミリー

# 教区 NEWS 教会

## お盆を迎えて

(死者のための祈り)

ゴザ教会

ゴザ教会では八月三十日(日)主日のミサ後、ピーター神父、新垣助祭司式のもと、お盆の祈禱式を行った。例年はお盆の中日に行われてきたが、お盆の期間中は多忙で参加出来ない信徒もいるということで、今年からお盆の前日に行われることになった。

平日は聖堂の後方に安置されている位牌(十字架を象った位牌で大城さん、門脇さんらが中心になって考案製作。ゴザ教会の死者信徒を明記)を前方特別祭壇の中央に移動し、その右



側に本年亡くなった信徒や祈願依頼のあった死者名のリスト、左側には当教会の主任司祭であられたエレミア神父、ルイス神父、中神父、また当教会ゆかりの幼きイエズス会シスター相川君代、平田マルエ、香嶋孝子、東盛芳江シスターらの写真が飾られた。

にこやかに微笑んでいるかのような写真は私たち一人ひとりに語りかけているようで懐かしさもひとしおでいつまでも見入っていたい気分であった。

位牌に刻まれた信徒名も懐かしく往時が偲ばれ時の流れを感じた。「あなた方が生きておられた頃は信徒も多く教会活動も盛んでした。今、信徒数も減り、高齢化で活動も低迷しているような感じがします。おまけにコロナです。熱中症、洪水と予測外の試練が人類を襲っています。先に逝ったあなた方はこの状況をどのように見ていらつしやるのでしょうか。天国にいらつしやる皆様、どうぞ現世の私たちを顧みて状況を好転して下さい。」

死者の霊を慰めるというよりいつの間にか現世の私たちを慰めて欲しいと逆転した祈りをしている自分に苦笑してしまっ。

お盆には死者が現世に帰って来るとい。生者は死者を、死者は生者を思い相手のために一緒になって神様に祈りを捧げるのがお盆ではないだろうか、とふと思つたことである。

(通信員 松堂康子)

### 訃報

#### 愛楽園教会

ヨゼフ 岸本 東吉 様  
2020年8月2日帰天 享年99歳

#### 与那原教会

モニカ 宮里 ヨシエ 様  
2020年8月8日帰天 享年79歳



## カトリック文化センターからお知らせ



いつも文化センターをご利用いただき有難うございます。今年はコロナ禍の影響もありバザー等の出張販売はできなくなりました。それに伴い今年は例年より早めにカレンダーや手帳等の店頭販売をスタートいたします。是非ご利用下さい。

問合せ:電話098-868-4649(新川・崎山)

●キリスト教関係の書籍、宗教用品等のご用命は、「カトリック文化センター」を通してご注文下さるようお願いしております。  
〒900-0005 那覇市天久 1-8-7

～ご遺族の心をもって奉仕する～  
そうてんしゃ

## 葬典社

- \*創業30数余年・・・。
- \*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- \*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。  
「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ  
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間  
受付

てんごく  
☎098-853-1059



## 葬祭の 「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里烏掘町4-57-3  
TEL&FAX:098-885-8205  
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai  
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間  
受付